

〔論 文〕

フランスのアラブ系二世文学に見る アイデンティティの「隔たり」と克服

—アズズ・ベガッグの自伝的小説にそいながら—

真 田 桂 子

はじめに —移民文学への相対的視点—

二十一世紀に入りグローバル化が加速する今日、世界の各地では様々な意味における「移民」を受け入れ、構成員の多様化が進んでいる。文学においても、多元化する社会を映し出し、移民に関わる文学はますます重要性を増している。

一言で「移民」といっても、それぞれの社会における移民の事情はきわめて多様であり、ジャンルとしての「移民文学」があるわけでも決してない。しかし世界のいたるところで、移民によって書かれた、あるいは移民をめぐる文学への関心と言及は高まりを見せている。従って、各々の地域の社会的な背景も含めながら、相対的にとらえる視点から考察することによって、今日の移民文学の動向の、新たな側面を照らし出すことが出来るのではないだろうか。

例えば、世界の各地から、永住を前提にカナダやオーストラリア、アメリカなどの新大陸に渡った移民の状況と、旧大陸であるヨーロッパに、旧植民地から大挙して渡ってきた移民の状況とでは、おのずから大きな開きがあるであろう。

この小論では、今後の比較検証を視野に入れ、そうした相対的な視点を踏まえながら、フランスにおけるアラブ系二世文学について考察する。フランスへの移民のなかで、旧植民地であった、マグレブ三国と呼ばれる北アフリカのチュニジア、アルジェリア、モロッコからのアラブ系移民は最も多数をしめる。そのアラブ系移民の子弟にあたるフランス生まれの第二世代はブル（Beur）と呼ばれ、今日のフランス社会において独自の存在感を放っている。とりわけ、二十世紀後半の1980年代から、そのアラブ系第二世代から多くの作家が輩出した。

アラブ系二世作家はどのような問題意識をもち、どのようなテーマを描いているのか。またフランスにおいてどのように位置づけられ、受け入れられているのだろうか？この小論では、アズズ・ベガッグ（Azouz Begag）の自伝的小説を取り上げ、その作品を手掛かりに、フランスにおけるアラブ系二世文学について考察したい。

I フランス社会とアラブ系二世文学

1. フランスの移民問題と第二世代

世界各地で移民の問題がクローズアップされるようになって久しいが、とりわけフランスでは、2005年の年末に、ビドンビルと呼ばれる郊外のゲットーに住む移民二世の若者が、警官と衝突して死亡した事件をきっかけに、パリ郊外を中心にフランス各地で暴動が広がり、世界にフランスの移民問題の根深さを知らしめることとなった¹⁾。

ここで、フランスの移民問題をごく簡単に概観してみたい。フランスの移民問題を特徴づけるものは、何と言っても植民地主義の遺恨ともいえる旧植民地からの大量のアラブ系移民たちとその社会統合

の問題である。ヨーロッパ列強が覇権を争っていた大航海時代、フランスはアフリカや北アメリカ、カリブ海地域からインドシナ、南太平洋にいたるまで植民地を広げていった。その後1960年代に入ると、世界史的な潮流のなかで植民地が次々と独立し、旧植民地から旧宗主国であるフランスへと多くの移民が移り住んだ。とりわけ、北アフリカのマグレブ三国と呼ばれるアルジェリア、モロッコ、チュニジアからは、地中海を渡り大量の移民が押し寄せる。アルジェリアが独立するにあたっては、鉱物資源に富む彼の地をフランスは容易に手放そうとはせず、フランスと激しい戦争に発展する。そしてアルジェリア戦争（1954-1962）として歴史に大きな禍根を残すことになる。イスラム原理主義が蔓延り、国を分断するかのような激しい戦闘の結果、荒廃した国を去って多くのアルジェリア人がフランスへと移住する。一方アルジェリアには、植民地支配のための多くのフランス人も住んでいた。ピエ・ノワール（Pieds Noirs）²⁾ と呼ばれ現地深く根付いていたそうしたフランス人の多くもアルジェリアを去ることになる。

フランスにやって来た北アフリカからのアラブ系移民のなかには、正規の受け入れを経た「合法移民」だけではなく、密かに国境を潜り抜け入り込んできた「不法移民」も多く含まれていた。フランスの移民問題の一つは、この「不法移民」の問題である。フランスで十数年前から台頭し根強く影響力を持ち続ける極右勢力は、移民たちが職を奪いフランス社会を混乱させていると声高に訴えている。また、たとえ合法的に移民となった場合でも、アラビア語を母語とし、ムスリムと呼ばれるイスラム教を信じる大多数のアラブ系移民は、フランスで大きな文化摩擦を引き起こしている。宗教と生活とが密着し、すべてが宗教によって、アラーの神によって統制されているイスラム教の世界と、キリスト教に基づきながらも歴史的な経緯から、政教分離の原則を貫こうとするフランス社会とでは、根本的に相容れないものが横たわっていると見えるだろう。

フランス共和国の原理であるライシテ（Laïcité）³⁾ は、しばしば「非宗教化」あるいは「世俗化」と訳されるが、いわゆる公共の場での宗教色の禁止を掲げるものである。1989年、フランスのある公立学校でムスリムの女子学生がスカーフを着用して停学になったことを発端に「スカーフ論争」が巻き起こる。ブルカと呼ばれる女性の肌を露出させないための装束を含め、ムスリムの女性が身にまとうスカーフは、西欧文明の民主主義に照らしたとき、しばしば抑圧の象徴のように捉えられる。公共の場である学校で、スカーフを着用しながら授業を受けようとした女子学生たちは、ライシテに抵触すると見なされたのだ。

フランスにやって来た移民たち、とりわけアラブ系の移民たちは、パリなどの大都市の郊外に、同郷の出身者同志が寄り集まりゲットーのような区域を作って住んでいる。半ばスラム化しているその移民たちの居住地は、ビドンビル（bidonville）と呼ばれている。あるいは、近年では郊外にH.L.M と呼ばれる低所得者用のアパート団地が次々に建てられ、多くの移民たちがそこへ移り住んでいる。そうした事情に加えて、中心から隔たった周縁的な存在であることを象徴的に示すように、移民問題はしばしば「郊外問題」とも呼ばれている。郊外の移民たちの居住地は劣悪な環境で、大部分の移民たちは経済的な困窮にあえいでいる。さらに、移民二世の若者たちは、フランス社会に受け入れられない閉そく感に苦しめられていると言えるだろう。

フランスの近年の移民問題において、とりわけ大きな波紋を広げていることに、この移民二世の若者世代の問題がある。注目すべきことは、フランスは「生地主義」をとっており、移民を親としてフランスで生まれた子供はフランス人として法的には認められている。しかし、実際にはフランス社会にすんなりと受け入れられることはなく、移民二世の若者たちは成長するに従って、貧困や生活苦といった問題に加え、教育や就職、結婚など、さまざまな局面で差別に直面することになる。先に言及した移民の若者世代の暴動もそうした事情が引き金となり、不満を募らせた郊外の若者たちによって引き起こされた事件であった。

このようにフランスの移民問題の根幹には、「自由・平等・友愛」を標榜しながら、普遍主義と平等主義の名のもとにあらゆる差異や問題を隠蔽し、現実には差別や偏見が蔓延る人権主義の国フランス

の、欺瞞と矛盾が先鋭に表れているといえるだろう⁴⁾。

2. アラブ系二世文学の興隆と受容

困難な状況におかれた移民二世のなかでも、ブル (Beur) と呼ばれるフランスで生まれたアラブ系二世は、フランス社会において独特の存在感を示している。文学においても、近年、例えば、アズズ・ベガッグ (Azouz Begag), レイラ・ウアーリ (Leïla Houari), アーマッド・カルーズ (Ahmad Kalouaz), レイラ・セバル (Leïla Sebbar), アキリ・タジャール (Akili Tadjer) など、アラブ系二世の作家が輩出し、自らの置かれた状況を描き出し問題提起を行いながら、フランス社会における自分たちの存在を積極的にアピールしようとしている。彼らの作品には、おそらくフランス語を話し書くことが出来ない親の世代の代弁の意味も含まれているであろう。そしてそこで描かれる主なテーマとしては、フランス社会の周縁に追いやられているアラブ系移民の現状についての問いかけや、不条理な状況の告発、そしてそこからの脱却の模索が含まれていると言えるだろう。さらに移民二世に特有の問題として、アラブ系移民のコミュニティで育ちながら、親のように実際の故郷を知っているわけでも帰れるわけでもなく、一方で、フランス社会にも完全には溶け込めないというアイデンティティのジレンマの問題がある。そうしたアイデンティティの揺らぎと逸脱は、それぞれの作家に固有のスタイルとスタンスによって描かれている。

そもそもアラブ系二世文学が目されるようになったのは、それほど以前のことでない。1950年代から70年代にかけてアルジェリアを中心とするマグレブ諸国から、大挙してフランスへと移住した移民を親とする第二世代がフランス語による表現活動を始めたのは80年代に入ってからであり、それらの作品が批評や研究の対象として認識され取り上げられるようになったのは1990年代に入ってからである。フランス文学における位置づけやカテゴリー、名称をめぐる議論、例えば「マグレブ系フランス語表現文学」と括られる場合との相違など、アラブ系二世文学は現在まで様々な議論にさらされてきた。アラブ系二世文学の特徴としてしばしば指摘されることの一つは、それらの作品は文学作品というよりも、もっぱら社会的、民族学的文献として読まれ、注目されているのではないかという点である。すなわち、それらの大部分は移民の共同体というマイノリティに属する立場からの体験談や記録としての価値はあっても、文学性を追求した作品とは言い難いのではないかという指摘である。もう一方で、アラブ系二世文学の大部分は、アイデンティティを追求する自伝的な作品が多く、青少年が主人公であり、その成長物語を軸とするいわゆる「教養小説」的なものであり、読者も青少年を想定した作品が多いという指摘である。両方の指摘に共通するのは、これらの作品の文学作品としての価値、すなわち文学性や芸術性についての問いかけである⁵⁾。

そうした議論を踏まえ、ここでは、アズズ・ベガッグ (Azouz Begag) の自伝的な小説である『チャーバの少年』 *Le gone du Chaâba*⁶⁾ を取り上げ、作品にそいながら、アラブ系二世文学において描かれるテーマや作品の受容について、その一端を考察してみたい。

II アズズ・ベガッグの『チャーバの少年』

アズズ・ベガッグ (Azouz Begag) は、1957年、社会学者としてリヨン郊外のヴィラーバンで、アルジェリア系移民の両親のもとに生まれた。苦学して大学に進み、フランス国立科学研究所の研究員を経て、2005年からは人権平等促進省の大臣に任命されている。若い時から文筆活動も繰り広げ、1986年には、最初の小説である『チャーバの少年』 *Le gone du Chaâba* を発表する。この作品は発表と同時に話題となって成功を収め、1997年には映画化もされている。

経歴が示すように、ベガッグはアラブ系二世としては幸運にも成功し、今では十分にフランス社会に受け入れられていると言えるだろう。しかし成功への道のりは決して平坦ではなく、社会から受ける様々な偏見や差別との闘いであり、自らのアイデンティティにおける葛藤の連続であったと言えるだろう。

1. 共同体としてのチャーバ

『チャーバの少年』は、ベガックが育ったリヨンの郊外、アラブ系移民が多数住みついたバラックが立ち並ぶビドンビルが舞台である。チャーバ(Chaâba)と呼ばれるその一画を舞台に、作家自身を彷彿とさせる少年が様々な出来事に遭遇したくましく成長しながら、とりわけ学校での成功によって認められ、次第に自らのアイデンティティの在り処に目覚めていく様が、フランス社会の周縁に押し流されながらも必死にしがみつき適応していこうとするアラブ系移民の家族の運命とともに、繊細かつユーモラスな筆致で描かれている。

物語の随所に、アラブ系が使うアラビア語なまりの特有のフランス語がちりばめられ、タイトルの「少年(gone)」にも、たくましい悪戯小僧といったニュアンスが込められている。小説の末尾には、共同体において登場人物が用いるアラブなまりのフランス語を解説した語彙録が付け加えられている。物語は主人公のアズズ少年の成長を軸に展開するが、アルジェリアからの移民でフランス語の読み書きも出来ない両親や近隣の住人たちの逸話から、フランスのアラブ系移民がおかれた一般的な状況が浮き彫りにされていく。

この小説では、まず何よりもチャーバと呼ばれるビドンビルの様子とそこでの人々の暮らしがつぶさに描かれていく。

突き出している土手の上から眺めると、あるいはチャーバの入り口にある木製の大きな門をくぐると、まるで木工場にいるかのような錯覚に陥った。(…) ところどころしか舗装が施されていない、でこぼこの中央の通りを挟んだその両脇に、今にも四方にばらばらに散らばってしまいそうな、トタン屋根と木板を大量に寄せ集めた家屋がずらりと並んでいた。通りの向こうには、共同トイレの掘っ立て小屋がポツンと建っていた。(…) 家屋は寄り集まって、互にくっ付き合っ建て建っていた。それは突風でも一吹きすれば、あつという間に一掃されそうな具合であった。それでもその寄せ集めのバラックの塊は、一画を取り囲んでいる土手とよく調和していた⁷⁾。

スラム化した、今にも吹き飛ばされそうな貧相なバラックの寄せ集まりでありながら、ビドンビルの情景はどこか突き抜けたような明るさをもって描かれる。

そしてチャーバの朝は、水汲みに井戸に集まる女たちの、かしましい喧嘩と取っ組み合いで幕を開ける。

母とジドゥーマ叔母は、男たちがいぬ間に、派閥を二分して根気いっぱい取っ組み合いの喧嘩をおっぱじめた。

— どうかアラーがあんたの目をえぐってくれますように、,,

一方が叫ぶ。

— あんたの掘っ立て小屋が今晚、焼け落ちてしまいますように。この雌犬め、眠りこけている間にお陀仏になっちまえ！

と、もう一方がやり返す⁸⁾。

痛快ですらある激しい罵り合いは、半ばスポーツのようであり尾を引いたりはしない。外側から見れば貧困にあえいでいる移民の暮らしの中で、アラブの女たちは明るくたくましく生き抜いている。

一方、男たちは、工場での仕事を終えた夕暮れ時、しばしばチャーバの空き地に集まって、アラブの音楽を聴きながら、煙草をくゆらし、コーヒーを飲み、仕事の疲れを癒しつつ政治談議に花を咲かせる。興が高じれば、互いの家の夕食に招待し、クスクスを分け合いながら話の続きを楽しんでいる。ここには、ささやかながら、チャーバという共同体の仲間同士の確かな繋がりがある。

ビドンビルは、アラブ系移民の大人たちにとって、言わばアラブ社会の「飛び地」である。すなわ

ち、フランス社会という外地—フランスに住みながらもその社会の一員として、決して受け入れられてはいないという意味において—の只中での唯一の安らぎの場なのである。大人たちは、そこに離れてきた故郷の幻影を見ようとするのである。

一方、移民の子供たちにとって、ビドンビルは彼らの生活の原点であり、彼らが生まれて成長していく故郷そのものである。近所には、親戚や従兄弟をはじめ、顔見知りの悪戯小僧たち (gones) が住んでいて、学校から放課後にいたるまで、何をするのも一緒である。密集するバラックが立ち並ぶ一画の裏手にはうっそうとした森があり、子供たちはそこで、小さな鳥や動物に罾をしかけて獲物をとる狩りに夢中になる。森の奥には普段は人気のない物置小屋があり、子供たちの秘密の遊び場になっている。子供たちが大人になる過程の通過儀礼のように、性の秘密に目覚めるのもここである。

貧しく、つましい暮らしのなかで、それでも愛情に包まれ、兄弟たちとともに元気に育っていく主人公のアズズ少年。勉強はよく出来るけれど少しひ弱なところがあるアズズは、チャーバで受ける洗礼のごとく、明け方の共同トイレで間違っておシッコを浴びせかけられる。チャーバにやってくる粗大ごみを満載したトラックに群がり、アズズと仲間たちの悪戯小僧たちは競い合い、数々のお宝を探し当てることに夢中になる。ある時、チャーバで商売をしようと入り込んできた「娼婦」の一行と取引に応じようとした男どもを、チャーバの実力者で顔であるルーイーザ婆さんは、悪戯小僧どもを引き連れ、石の弾丸攻撃を仕掛けて撃退するのである。そんな数々の、ユーモラスでたくましく、ちょっぴりほろ苦いエピソードがギャロップのように次々と描かれていく。

すなわちここに見られるのは、貧困、不衛生、無秩序などの惨めな環境におかれた移民というステレオタイプのイメージを打ち破るかのような、突き抜けた明るさであり、むしろそうした側面を逆手に取って、たくましく生きようとするポジティブなイメージのもとに描かれる移民たちの姿である。

2. フランス社会の入り口としての「学校」

この小説に描かれるもう一つの舞台は、子供たちが通う学校である。移民の子供たちにとって学校は、ビドンビルという共同体の外に開かれたもう一つの世界である。それはいわば、閉じたアラブ系社会から踏み出して、フランス社会へと通じる入り口なのである。

白人の生粋のフランス人や、ユダヤ系フランス人などの生徒も通うその公立学校は、フランス社会の縮図そのものである。アズズ少年が属するクラスの担任は、少し厳格だけれど人情味もあるグラン先生。クラスで成績がトップなのは、いつもフランス人のラヴィルと決まっている。対照的にクラスのビリケツを競っているのは、アズズのアラブ系の仲間たちのムサウイやナセルである。聡明で勉強のできるアズズは健闘し、ラヴィルの次につけるくらいの成績を取めて、グラン先生から認められる。とりわけ得意の「作文」の課題では、一番うまく書けていると褒められる。しかし、アズズはそのためアラブ系の仲間たちから責め立てられ、すっかりつまはじきにされてしまう。

アメッドとナセルは自分たちの成績が悪いのは、グラン先生がラシスト (人種差別主義者) だからだと言い張り、それに同意しないアズズを指弾して責めたてる。

(…)
ムサウイが言った。

— そうかい、やっぱり、こいつはアラブ人じゃないんだ。

— とんでもない、僕はアラブ人だよ。

— もしおまえがアラブ人なら、どうして俺たちみたいに、クラスでビリケツにならないんだ！

(…)

— いや、僕はアラブ人だ。よく勉強したからいい成績が取れただけなんだ。誰だってそうなるよ。

— じゃあ聞か、休み時間、どうしていつもフランス人とばかり一緒なんだい？⁹⁾

アラブ人の仲間たちの詰問に、アズズは正直のところたじろいでしまう。

仲間たちが指摘するように、「アラブ人でありながら、どこかでフランス人になりたがっている」自分があることを、認めざるを得ない。学校はこのように、アズズ少年にアイデンティティの問題を鋭く問いかけてくる場所であった。

フランス語を書くこともできず、クレオール化した独特の単語を発する親たちと対峙するときも、アズズ少年はしばしば出自について複雑な思いにとらわれる。物語の終盤、リヨンの街に移り住み、新しい学校に通い始めたころ、母親のエンマが思いがけず、校門の前まで迎えにくる。スカーフを纏い、見るからにアラブ系だと分かる装束で現れた母親に、アズズは恥ずかしさを禁じ得ない。母親は困惑している息子の気持ちを見通すが、アズズは親子の間に横たわる距離感をひしひしと感じていた。

3. 失樂園としてのビドンビルと成長物語

一方、この小説は、アズズ一家が、親戚が牛肉不正処理事件で摘発されたのをきっかけにチャーバを追われ、大都会リヨンの片隅に流されていくまでが描かれる。それは、ちょうど「失樂園」をイメージさせるかのようで、チャーバーというビドンビル、すなわちアラブ系移民たちが身を寄せていた「楽園」から追放され、移民の一家はフランス社会の只中へと導かれ、新たな現実と直面していくのである。

新しい大都市で生活し始めた一家には様々な試練が降りかかる。父親のブジッドは、アラブの共同体の生活を懐かしみ、何度かチャーバに戻ろうと試みる。一方、アズズは、アラブに執着し続け、フランス社会に向き合おうとしない父親を暗に批判しながらも、やはりチャーバでの生活に郷愁を抱く。

アズズは新しく通い始めた学校で、アラブ系を蔑視する教師のバラール女史に出会い気持ちをくじかれる。バラール女史は、アズズのフランス語の作文に剽窃の疑いをかけて、その価値を認めようとしなない。しかしその後、アルジェリアに住んでいたというピエ・ノワール（アルジェリア帰りのフランス人）であるルボン先生に出会う。ルボン先生はイスラムの文化を尊重し、自らもアラビア語を話し書くことが出来ることをクラスの皆の前で示す一方、アズズにアルジェリア出身のフランス人のなかにも素晴らしい作家がいることを教えてくれる。そしてアズズがレイシズムについて考察した作文を高く評価して、皆の前で褒め称えるのだった。アズズは、ルボン先生のアルジェリアへの理解や関心、そしてアラブ系の生徒への愛情と励ましによって大いに勇気づけられる。

この小説に登場する二人の対照的な教師の存在は、フランス社会におけるアラブ系二世への二つのまなざしを象徴的に表していると言えるだろう。一つは、移民とその子弟をフランス社会の厄介者とみなし、アラブ系二世を蔑視し疎んじる極右勢力に代表される見方であり、もう一方は、アラブ系二世の存在をフランスの歴史の流れのなかで生み出された嫡子として正当に受け入れようとする見方である。アズズは、ピエ・ノワールであるルボン先生との出会いにおいて、初めてフランス社会と自分との確固たる繋がりを見出したと言えるであろう。

このようにアズズ少年は、生粋のフランス人とともに学ぶ公立学校での学業の成功や、様々な出会いによって勇気づけられ成長し、次第にフランス社会に生きるアラブ系二世としての自らのアイデンティティの在り処を見出していく。そのような意味で、この小説はフランスにおけるアラブ系移民社会を内側から捉えなおし、新たな視点のもとに価値付けを行った作品であるとともに、アズズ少年が成長し、自らのアイデンティティに目覚めていく成長物語であり、よく言われるところの「教養小説」The Buildings Romans ととらえることが出来るであろう¹⁰⁾。

4. 作品の受容：賞賛と反発

すでに述べたように、アズズ・ベガックの『チャーバの少年』は出版と同時に大きな成功を収め、その後、中学やりせ（フランスの高等学校）の教科書として採用されることになる。しかしこの作品の教科書の採用に対して、一部の父兄から、この作品が青少年向けのものとして適切さを欠いた表現を含む

ものだと大きな反発が巻き起こる。一連の議論は、ル・モンド紙などフランスの主流のメディアにも取り上げられ論議を呼んだ¹¹⁾。ここではその論議の内容に詳しく立ち入ることはできないが、こうした反発の背後には、当時（1988年頃）のフランス社会におけるアラブ系移民とその二世に対する偏見や差別的な感情があったことは否めないであろう。

一方、すでに検証したように、ベガッグの小説は確かにアラブ系二世文学の特徴としてしばしば指摘される「自伝的」な作品で、成長していく青少年が主人公である「教養小説」的な作品であった。しかしその小説は単なる記録的な作品にとどまるものではなく、文学性や芸術性においても決して劣っているわけではないであろう。アラブ系移民の親世代が使うアラビア語が入り混じった断片的なフランス語を駆使して、ベガッグはアラブ系共同体の日常を恥じるべきものとしてではなく、むしろフランス社会に開かれる一つの異次元であるかのように積極的に描き出す。テキストに織り込まれた多元性、そうした多声的、複数言語的に響き合うベガッグの文体は、確固たる信念としたたかな戦略から生まれたものであろう。実際にベガッグの小説を教科書として採用した学校の校長は、父兄の反発に対して、ベガッグの文体の複雑さと豊かさを引き合いに出しながら、その文学的価値を擁護している。

Ⅲ アイデンティティの「隔たり」と克服

ベガッグは、アラブ系移民のあり方について社会学的に考察をめぐらせたエッセイ¹²⁾で、アラブ系二世に固有の特徴として、アイデンティティの「隔たり」*écart*をあげている。ここで言う「隔たり」とは、アラブ系移民全般がおかれた状況としての、フランス社会そのものからの逸脱、周縁化された状況そのものを指し示すとともに、アラブ系移民コミュニティ内部での、親世代と子世代との間に存在する隔たりでもあると述べている。すなわち、アラブ系二世はそうした二重の「隔たり」のなかに生きざるを得ないというのである。

ベガッグは、アダムとイヴの楽園からの追放や、ノアの方舟、モーゼのエジプトからの脱出など、神話的な移住の逸話から掘り起し人類にとっての「移民」や「移住」の意味を問い直している。親世代が体験した移民とは、まさに祖国を離れ、自らを培った一つの社会と文化から身を引きはがす痛みを伴った根拠の体験であり、受け入れ先の新しい社会と文化に接ぎ木するダイナミックな体験であったと言えるだろう。そして、移住してきたフランス語を話すことも書くことも出来ない親世代の移民にとって、アラブ系の共同体を形成するビドンビルはいわばフランス社会という外地にできた「飛び地」である。彼らはそこでとりあえず新しい受け入れ社会にある程度の適応ができるまで、密封された「気密室」のようにフランス社会という外界から身を守ることが出来るのである。親世代は、ビドンビルにおいて故郷を懐かしみ、祖国での言葉も生活習慣もほぼ維持しながら生活することが出来る。つまり彼らは、社会経済学的な観点からは、ここ（フランス）に居るのだが、心理学的には彼方（アルジェリア）に居るのである。一方、フランスで生まれた第二世代にとって、ビドンビルは故郷そのものである。第二世代はこのアラブ共同体において、確かに親世代が保持するアラブ・イスラム系の生活習慣や文化、そして言語のなかで育つ。しかし、移民の親からその子供たち、すなわち第二世代が引き継ぐ「文化」とはたして何であるのか？とベガッグは問いかける。それは実際には「文化」の総体ではなく、細分化された文化のかけらや断片のようなもの、生活スタイルの一部やステレオタイプ的な文化のイメージでしかないのではないのか。すなわち受け継がれていくものとは、アラブ・イスラムの「神話化された文化」に過ぎないのである。それに加えて、第二世代は、主に教育を通しフランス社会から強い影響を受けながら成長していく。第二世代はこうしてアラブ・イスラムの「神話化された文化」と現前する強大なフランス社会と文化とに引き裂かれ、その両方とも極から隔たって、その間を揺れ動きながら成長するのである。このようにベガッグは、アラブ系移民の親世代の状況と第二世代がおかれた状況とは全く異なることを分析している。

さらに、第二世代は長じてフランス社会のなかで深刻な状況に直面する。アイデンティティの問題に

揺れ動き、親世代との違いを認識した上で、「フランス人」として社会の一員たろうとしても、様々な差別を被りフランス社会において容易には受け入れられないという現実にあえぐのである。ベガックはアラブ系二世の若者が、そうした壁に直面し、暴力、麻薬、売春などの様々な逸脱に走ってしまっていることを深く嘆いている。そしてフランスにおけるアラブ系二世 (Beur) の状況は、アメリカにおける黒人の状況とよく似ていると指摘しながら、この問題を社会の外側に位置づけるエスニックな、あるいは人種的な問題と捉えるのではなく、むしろ社会の内側での社会統合的な、マイノリティの問題として捉えるべきだと主張している。

ベガックの小説もそうであったが、アラブ系二世の作家の多くが、作品のなかで様々な意味で他のフランス人との繋がりを求め、フランス社会のなかでのアイデンティティの在り処を模索するテーマを描くのは、こうした問題意識が背景にあるからであろう。アラブ系二世に固有のアイデンティティの二重の「隔たり」を克服するためには、アラブ系二世がフランス社会の内側から、内発的に新しいポジティブな状況を作り出していく以外にないことをベガックの小説は力強く物語っているとと言えるだろう。

結語にかえて

フランスにおけるアラブ系の状況は、ちょうどアメリカにおける黒人や日本における在日韓国・朝鮮人らの、圧倒的なマジョリティのなかにまとまった共同体をなすマイノリティとしての状況と通じ合うものがあるだろう。従って、フランスにおける「移民文学」として近年注目されているアラブ系二世の文学は、例えばケベックにおいて多様な出自からなる移民たちによって創造された「移民文学」とは大きく様相を異にする¹³⁾。その詳細な比較検証はまたの機会に譲ることにしたいが、ここで言えることとして、アラブ系二世の文学は、その固有の状況を反映し、「移民文学」に共通するテーマであるアイデンティティの揺らぎとその模索を表現しながらも、とりわけ受け入れ社会との結びつきとそこでの自己実現に重点が置かれているように思われる。また、作品の受容に関しては、多様性に開かれたフランス語に対して寛容で、移民の貢献を積極的に認めるケベックに比べると、フランスでは伝統的なフランス文学の規範を普遍的なものとし、それに照らした評価がなされる一方、フランス社会にくすぶるアラブ・イスラム系移民に対する差別感情を反映し、アラブ系二世作家の作品は賞賛と反発を引き起こしていると言えよう。

しかし、ちょうどベガックがエッセイにおいて用いた美しい比喻；新しい土地に植えられた接ぎ木と、その木に実った果実が落ちて土壌を肥やし変えていくように、アラブ系二世の作品は新しく芽吹き始めた文学として、波紋を広げながらフランス社会やフランス文学のなかに確固たる存在感を獲得しつつあると言えるだろう。

注

- 1) この事件については、メディアで「移民出身の若者」が中心となって起こしたと報じられているが、その真偽については様々な意見がある。
- 2) フランス語の *Pieds Noirs* とは、日本語に訳せば「黒い足」という意味である。
- 3) ライシテは、他国では必ずしも明文化されていない「非宗教性」「政教分離」に関わるフランス独自の重要な原則、制度であり、近年注目されている。
- 4) 例えば宮島喬氏は、「フランスは「平等の祖国」という自負をもちながら、久しく憲法前文的な宣言をもって、移民の社会的受け入れに対応してきた。「平等」のフランス的考えは、社会諸成員をつとめて普遍的・抽象的個人として等しく扱おうとするもので、ヨーロッパ系移民を受け入れるには、それであり問題がなかった。…では、「ヴィジブル・マイノリティ」の時代に、フランスの平等の理念は、成員の属性上の差異をどのように扱うのだろうか。いつさいの属性をカッコにくくり普遍的・抽象的個人として扱うとは、ヴィジブル・マイノリティにとってはいったい何を意味するのか。それは、彼らが肌の色や、宗教や、日常行動を理由に差別されているという動かしがたい事実を素通りし、無視することではないのか。…」と述べながら、移民二世を中心とするフラ

Mar. 2012 フランスのアラブ系二世文学に見るアイデンティティの「隔たり」と克服

ンス的統合の危機について問題提起を行っている。(『移民社会フランスの危機』, 宮島喬, 岩波書店, 2006年, 序文)

- 5) 「マグレブ系フランス語表現文学」という名称を用いる場合, 例えばアブデルケビール・ハティビ (Abdelk'ebir Khatibi) や, タハール・ベン＝ジェルーン (Tahar Ben Jelloun) など, モロッコ出身でフランスの大学で学び, 後にモロッコに帰ってもフランスとマグレブとを股にかけフランス語による活発な表現活動を行い世界的にも高い評価を得ている作家も含まれることになろう。しかしこうした作家とアラブ系二世 (Beur) 作家との状況は大きく違っている。

フランスのアラブ系二世 (Beur) 文学については, 近年, 英語圏を含む様々な方面から注目されて研究がすすみ, まとまった研究書も出されている。例えば, *Autour du Roman Beur, Immigration et Identité*, (Michel Laronde, L'Harmattan, 1993), *Littératures des Immigrations, Etudes littéraires maghrébines No7*, (sous la direction de Charles Bonn, L'Harmattan, 1995), *La Littérature migrante dans l'espace francophone -- Belgique-France-Québec-Suisse*, (Monique Lebrun et Luc Collès, E.M.E., 2007) などが挙げられる。Beur 作家の文学性について, 例えば Abdallah Mdarhri-Alaoui は, その文学性や芸術性がしばしば疑問視される傾向に触れながら, Beur 作家の文体を饒舌的飽和的文体, 言語統合的文体, 欠落的文体といったタイプに分類し, その芸術的特徴について分析し文学的価値を擁護している。(«Place de la littérature <beur> dans la production franco-maghrébine», *Littératures des Immigrations, Etudes littéraires maghrébines No7*, sous la direction de Charles Bonn, L'Harmattan, 1995, pp.41-50.)

- 6) Azouz Begag, *Le gone du Chaâba*, Seuil, Point, 2005 (1986)
 7) Azouz Begag, *Ibid.*, p.11.
 8) Azouz Begag, *Ibid.*, p.9.
 9) Azouz Begag, *Ibid.*, pp.102-103.
 10) いわゆる「教養小説」の伝統は英語圏文学においてよく語られる。
 11) ベガックの作品の教科書採用とその波紋に関する記事としては, 例えば "Azouz contre racine", *Le Monde*, 25 février 1988, "La prof enseignait le porno", *Minute*, 16 mars 1988など。
 12) Azouz Begag, *Ecart d'Identité*, Seuil, 1990

ベガックは社会学者として, このエッセイにおいて人類にとっての「移住」の意味から解き明かし, 親世代が経てきた移民体験の追想と分析から第二世代の継承と離脱の状況の検証にいたるまで, 独自の視点からフランスにおけるアラブ系移民がおかれた状況を総合的に考察するとともに, 今後の展望についても興味深い考察を繰り広げている。

- 13) ケベックの「移民文学」については, 拙著『トランスカルチュラルリズムと移動文学—多元社会ケベックの移民と文学』(真田桂子, 彩流社, 2006, p.298)において詳しく論じた。

【付 記】

この論文は, 平成23年度科学研究費補助金基盤研究C (課題番号21520357:「ケベックを中心とする仏語圏文学のトランスミグランス—移民作家受容の比較研究」)を受けての研究成果の一部である。

(2011年11月25日掲載決定)